

日本社会関係学会第2回研究大会
研究報告賞
受賞報告論文と発表セッション

日本社会関係学会第2回研究大会
研究報告賞受賞作品と発表セッション

最優秀賞研究報告賞 (1点)

要藤正任・打田篤彦 (京都大学) 「Life Satisfaction Approach を用いたソーシャル・サポートの
価値評価の試み」

3月20日(日) 13:00~14:30 F3【公募報告10】 幸福度・満足度と計測

優秀研究報告賞 (2点)

梅溪健児 (法政大学) 「東京から地方への移住可能性に関する実証分析」

3月20日(日) 13:00~14:30 F4【公募報告11】 ソーシャル・キャピタルの経済分析

竹内寛貴 (千葉大学)・井手一茂 (千葉大学)・林尊弘 (星城大学)・阿部紀之 (千葉大学)・近
藤克則 (千葉大学) 「高齢者の社会参加とフレイル発症リスク : JAGES2016-2019 縦断研究」

3月20日(日) 09:30~11:00 D4【公募報告7】 高齢者の社会参加と就労

奨励賞 (1点)

門間浩勝 (石巻専修大学) 「新規学卒者の新たな就活指標」

3月20日(日) 11:10~12:40 E3【公募報告9】 ソーシャル・キャピタルと教育政策

授賞式

3月20日(日) 14:45~15:15

佐藤嘉倫・大会運営委員長による講評と受賞者のスピーチが予定されています。

講 評

第2回日本社会関係学会研究大会運営委員長 佐藤嘉倫

このたび厳正な審査の結果、最優秀研究報告賞が要藤正任氏・打田篤彦氏の共同報告に、優秀研究報告賞が梅溪健児氏の報告と竹内寛貴氏・井手一茂氏・近藤克則氏の共同報告に、奨励賞が門間浩勝氏の報告に贈られることになりました。おめでとうございます。

いずれの報告も卓越した内容のもので、私自身、審査のために拝見してとても感銘を受けました。さらに嬉しいことは、それぞれの報告で扱われているテーマが多様だということです。要藤氏と打田氏の共同報告は生活満足度を被説明変数とする線形モデルによってソーシャル・サポートの価値を捉えようとするものです。梅溪健児氏の報告は東京から地方への移住可能性に対してプッシュ要因とプル要因の両方からアプローチしたものです。竹内寛貴氏・井手一茂氏・林尊弘氏・阿部紀之氏・近藤克則氏の共同報告は、高い評価を受けている日本老年学的評価研究データを用いて高齢者の社会参加とフレイル発症リスクの関連を分析したものです。門間浩勝氏の報告は離職率情報を開示することが離職率を下げることを示しています。

このように、授賞報告は多様なテーマを扱っていて、このこと自体が本学会の多様性を反映しています。またどの授賞報告も内容の水準が高いだけでなく、政策的インパクトや社会的インパクトを有しています。このことも研究者だけでなく実務家やNPO・NGO関係者も本学会で活躍していることを反映しています。本学会は社会関係を主要テーマとしていますが、学会と社会とのつながりも大切にしていきたいと思っています。

本大会では2日目に優秀研究報告賞・奨励賞表彰式があり、受賞者の皆さんのスピーチがあります。ぜひご参加くださり、受賞者の皆さんを祝福していただければと思います。

受賞者のことば

最優秀賞研究報告賞 要藤正任・打田篤彦（京都大学）

「Life Satisfaction Approach を用いたソーシャル・サポートの価値評価の試み」

困難に直面したり悩んだりしているときに、自分を気遣ってくれたり親身になって相談にのってくれる人がいてくれることは本当に幸せなことです。しかし、すべての人にそのような人がいるわけではありません。Covid-19 の感染拡大により、孤立する人・孤独な人の問題がこれまで以上に深刻なものとなっています。こうした人々のサポートには政策的な支援も必要ですが、当然コストがかかります。このような政策の効果を他の政策と比較可能な形で「見える化」できれば、政策的議論が更に深まっていくのではないのでしょうか。

今回の報告では、心理学における知見と経済学的手法を応用して、自分を気遣ってくれる人や困ったときに助けてくれる隣人の金銭価値を試算しています。こうした存在は、(本当は) priceless なのかもしれませんが、この報告をきっかけにソーシャル・サポートといった日常的な人々のつながりに関する議論がより深まり、孤立している方が少しでも周囲からのサポートを受けられるようになれば、これにまさる喜びはありません。

このような賞を頂いたことは望外の喜びで、これまでの研究を支えてくれた多くの方々に感謝の意を伝えると同時に、今後より一層精進して研究を進めて参りたいと思います。

優秀研究報告賞 梅溪健児（法政大学）

「東京から地方への移住可能性に関する実証分析」

地方創生の取組みが本格化して8年目となるが、東京一極集中が依然として続いている。それには、東京（一都三県）から地方への転出者数が傾向的に減少している影響が大きい。これを踏まえ、地方移住の選択に作用する要因を具体的に明らかにすることが本研究の目的である。

個人の効用最大化の枠組みで分析するために、インターネット調査により個票データの収集を行った。そして、商品開発に用いられるコンジョイント分析を移住地選択に適用したことが本研究の独自性である。それは移住の意思決定に関する仮想的な状況を創り出し、移住地選択に作用する属性の相対的な効果の計測を可能とする。

分析結果から一つ紹介すると、移住の判断に雇用条件が6割のウェイトを占め、1割の所得減までが移住を後押しする一つの目安であることを示した。仕事が移住には重要だという主張に目新しさはないが、エビデンスとして数値化したことにより政策討議に貢献できるものと期待している。

今回受賞したことは大きな栄誉であり、そして身の引き締まる思いである。本研究に助成を賜った（一財）社会文化研究センター及び助言をいただいた同僚・友人に心から感謝申し上げたい。

優秀研究報告賞 竹内寛貴 (千葉大学)・井手一茂 (千葉大学)・林尊弘 (星城大学)・阿部紀之 (千葉大学)・近藤克則 (千葉大学)「高齢者の社会参加とフレイル発症リスク：JAGES2016-2019 縦断研究」

この度は、優秀研究報告賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。

本研究は、近藤教授をはじめ、共著者の方々、研究室の皆様に温かくご指導いただき、受賞に至ることが出来ました。また、研究に協力して下さった日本老年学的評価研究 (Japan Gerontological Evaluation Study: JAGES) の関係者、研究参加者、協力自治体の方々にも深く御礼申し上げます。

高齢者の社会参加の促進は、フレイルを予防できることが示唆されていますが、これまでの先行研究では一般化可能性に言及できないなどの限界があります。そこで、本研究では、JAGES2016・2019 年度調査に回答した 28 市町 (高齢者 54,534 人) のデータを用い、スポーツや趣味など、5 種類の住民主体の通いの場に参加している人では、フレイル発症リスクが低いのかを検証しました。

その結果、5 種類いずれの社会参加も寄与し、その数が多いほどフレイル発症リスクが低いことが示されました。フレイル予防において、より多くの種類の社会参加がしやすくなる地域コミュニティの醸成が必要です。今後も、社会参加を通じたフレイル予防に貢献したいと考えます (竹内寛貴・記)。

奨励賞 門間浩勝 (石巻専修大学)

「新規学卒者の新たな就活指標」

新規学卒者 (若年者) の早期離職については、組織社会化の観点から多くの研究蓄積がなされてきた。社会の変化が激しさを増し不透明になればなるほど、未来を担う若者のキャリア形成を長期的な視点に立って支援していくことが重要性を増す現代、不本意な早期離職を防ぐには若年者と企業とのマッチングの精度を高めねばならず、そのためには業界や職業、企業に関する客観的な情報提供が必要である。

早期離職の問題が抱える理由や背景 (社会的や学術的)、潜在する課題について探究すべく、定年退職後、石巻専修大学大学院経営学研究科に昨年入学、関口先生のもと新規学卒者 (若年者) の就職と離職 (率) の関係について研究しております。ミスマッチや早期離職の要因を究明し、若年者の円滑な職業への移行と定着化へと要因解消に資する政策提言を行いたいと考えております。

この度は奨励賞にご選出いただき誠にありがとうございます。査読や選考に携わった全ての皆様、本研究に関して助言いただいた皆様に心より感謝申し上げます。初めての学会入会、初めての論文投稿、初めての受賞となり、3 つ目の初受賞は想定外で大変驚愕しております。今回の受賞を励みに、より一層精進して参りたいと思います。